

光増寺

東京都葛飾区東金町

当寺は、蓮池院摂取山光増寺と称し、親鸞聖人の直弟随信房法海上人の開基である。

聖人御年五十二才、人皇七十七代後堀川帝の元仁元年（一二二四）五月三日稲田より、葛西巻岐守清重の請により、渋江の館に御巡錫の砌、真弟善性房鸞英、順信房円慶、蓮位房善俊の三弟子と共に、念仏誦経の声聞ゆるここ金街の菴に一夜を明かされ、他力念仏の深意を懇に説き給い、菴主法海随喜の余り、速かに師弟の約を結び随信房と名を賜ふたのである。其の後渋江と金街を往還して念仏弘通に身命を惜まれなかった。九年を過ぎ、聖人六十才稲田より都へ御帰洛の折、貞永元年（一二三二）八月十一日、当菴に御立寄りになり、道俗を集めてお別れの法筵を開かれ聖人御法悦の余り、光明遍照、十方世界念仏衆生摂取不捨の意を、



光増寺 本堂

明暮れに思い染めぬる花の戸や
我が身を護る光り増すらん
と、御詠あり、聖人自から光増寺と名付け給うたのである。
（「光増寺略縁起」より）

天正一五年（1587）浄土宗に転じるが、江戸時代になっても親鸞聖人命日には取越し法要が持たれたと伝える。

光増寺・真向阿弥陀如来

当寺に伝はる親鸞聖人御感得真向如来尊像及び、三名号の一軸は、貞永元年聖人稲田より御帰洛の時、当寺に御立寄りになり法筵をお開きの折、金街の随信房法海、渋江の西光房善慶、野田の西念房信乗、石垣の金光房信了の四師に、「我に代りて東国の道俗を化益せよ」と各々帰還させられた際、かねて御持参の聖人御感得の三方正面の阿弥陀如来の尊像を取り出して、裏面中央に六字、左右に九字十字の名号を認め、御花押まで副えて随信房に御形見として授与されたもので、文政元年賢誉喚道和尚仏を蒙り初開帳するまで、五八六年祕仏として伝はり、文政六年二月に、絵表所石井三太夫松歳氏に依頼して、尊像と三名号の両軸にしたもので、寺宝として現在伝はるものである。

（「光増寺略縁起」より）



光増寺 真向阿弥陀如来